

T Y K

TOKAIDO YOTSUYA KWAIDAN

東海道四谷怪談

序の幕

第三稿

原作／鶴屋南北

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiaki J. Konaka

2005\07\12

登場人物

鶴屋南北

民谷伊右衛門……………浪人

民谷お岩……………四谷左門の娘／伊右衛門の妻

四谷お袖……………お岩の義妹

伊藤お梅……………伊右衛門隣家の武家娘

佐藤与茂七……………お袖の許嫁

直助権兵衛……………かつて伊右衛門の家臣

宅悦……………按摩／地獄宿主

小仏小平……………伊右衛門家の奉公人

秋山長兵衛……………伊右衛門の浪人仲間

四谷左門……………お岩の父

お楨……………お梅の乳母

松井幸三……………二枚目作者／南北の部下

○闇の舞台

暗い抽象的空間に——、ぼうっと白いものが見える。
それは——、着物を着た女の後ろ姿だ。

南北「(モノ)——お岩様……。あなたの祟りは、一八〇年経
っても尚、続いている。それ程までに、あなたの恨みは
深いのだろうか——」

徐々にはつきりと見えてくる女の姿。

南北「(モノ) あなたを主人公とした歌舞伎芝居『東海道四谷
怪談』は、文政八年に大変な評判をとった。しかし、
その作者である私、そして私の息子など十八人も人間
が、それから五年の間に死んだのである……」

女、こちらに向かって振り向く。その顔はまさに——

○中村座舞台

舞台の明かりが灯る。

舞台上には、お岩の化粧をした尾上菊五郎。

稽古の途中であった。大道具を建てつける音が響き
始める。

その様子を客席後方から見ていた長身の男——。

南北「(モノ) 私の名は四世鶴屋南北。実の名は勝俵蔵という」
以降、南北の顔は極力画面に見せず。

○メイン・タイトル「TYK」

○中村座／外観

S「文政八年」

○同／役者部屋／作者部屋

若手役者が化粧をしているところを抜けていく南北。

南北「(モノ) これまで多くの怨霊話を芝居にしてきたが、見

物に來た客が、見た事を後悔するまでの恐ろしい芝居では無かった」

役者部屋の奥、小さな部屋が、作者部屋。二枚目作者の松井幸三ら、執筆作業している若い者達が南北に挨拶をする。

自分の机に座る南北。幸三が上がった原稿を南北に差し出す。

南北「(モノ)この時私は七一歳。作者として生きられるのももう僅かな時しか残されてしまい。本当に恐ろしい怪談を書きたい。そういった衝動が私を動かしていた」

じつと幸三の原稿を読む南北。幸三は神妙に南北を見つめている。

南北、小さく首を振る。

幸三、苦渋の顔で原稿を引き取り、礼。

南北「(モノ)お岩という幽霊を巡る噂話を基に、私は筋を考えていた。だが——、本当は、私はこの物語を書かされていたのではないだろうか——」

暗転

○狩場

小沢村、今は高円寺辺りの野原。鷹匠が鷹を飛ばす。遊興に來ている赤穂藩の武士達の中に、酷薄にして刃の様な美しい男がいる。民谷伊右衛門。

南北「(モノ)この恐ろしい因縁話の主人公、民谷伊右衛門とお岩も、出会ってから一旦は夫婦の契りをして子を授かるまでは、幸せであった筈だ……」

鷹が捉えたのは兎ではなく野鼠であった。鋭い爪に掴まれ、きーきーと泣き喚く。

可笑しくて笑う武士たち。と、そこからやや離れたところで、父の伴に來ていた美しい女と伊右衛門は目が合う。四谷左門の娘、岩。

岩の傍らには義妹のお袖。

お袖「お岩姉様」

お岩「え？ ああ、今行くわ」

お袖に従う下僕の直助。

と、向こうからお袖を呼ぶ男の声。

与茂七「お袖さん」

お袖「与茂七様——（恥じらう）」

与茂七を嫉妬の目で睨む直助。

岩も、袖、父の左門に従って帰っていくが——、振り向く。

お岩「——」

伊右衛門「——」

視線を交わし合う二人——。

南北「（モノ）だが、この時集っていた赤穂藩の武士達は、

主家が断絶した事で皆一様に浪人の身分となってしまう」

暗転

○歌舞伎絵モンタージュ

『仮名手本忠臣蔵』の芝居絵をバックに——

南北「（モノ）伊右衛門らの主君であった浅野内匠守は、殿中

であるのに関わらず、吉良上野介に斬りつけるという事件が起こった。これにより浅野内匠守は切腹。赤穂浪人

達は吉良に仇討ちするのではないかと囁かれていた——。そう、この『東海道四谷怪談』は、忠臣蔵の物語を背景にしている——」

○浅草寺境内／春の午後

すっかりと落ちぶれた風情の四谷左門が、下賤な町民に足蹴にされている。

運哲「この野郎。誰に断ってここで物乞いしやる」

左門「これは悪かった。赦してくれ」

泥太「何抜かしやがる、この野郎（蹴る）」

と——、そこにふらりと現れる浪人姿の伊右衛門。

伊右衛門「それくらいにしてやれ」

まさに色悪という、崩れた色気を滲ませている。

運哲「何だ手前」

左門「(動揺)これは――、民谷伊右衛門――」

運哲、伊右衛門に殴りかかろうとするや、伊右衛門、素早い身のこなしでそれを払い刀に手をかける。

運哲「畜生」

伊右衛門、金子を放り

伊右衛門「これで勘弁してやれ」

運哲ら、顔を見合せ、金をとって逃げていく。

その伊右衛門の振る舞いを、やや離れたところから見つめている美しい武家娘、お梅。傍らには乳母のお槇。お梅の目は、狂おしいまでに伊右衛門を恋情している――。

お梅「民谷、伊右衛門どの……」

伊右衛門、左門に手を差し伸ばすが、左門はそれを遮り自力で立ち上がる。

伊右衛門「お舅殿、怪我はないか」

左門「貴殿と岩は既に離縁させた仲。とうにわしは舅ではない」

伊右衛門「――お岩と私は互いに思い合う仲。しかもお岩は私の子を懐妊している。こうして助けたのも何かの縁。お岩を戻してはくれまいか」

左門「――(憤怒を堪え)貴殿の様な盗人に娘は戻さぬ」

伊右衛門「(目を細め)拙者が盗人と？ 何を申されるか」

左門「お家が断絶する前、御公金が何者かに盗まれたが、その金は民谷伊右衛門、貴殿が盗んだのであろう」

伊右衛門「――何を証拠に」

左門「貴殿が結納で持ってきた金子に、御公金の印がついておったのだ！」

▼フラッシュ／小さな刻印が押された小判

左門「時が時なら貴殿など打ち首ぞ！」

伊右衛門「――」

左門「左様な貴殿などに、如何に落ちぶれようとこの四谷左門の娘を嫁がす訳には参らぬ！ 御免」

去っていく左門を、伊右衛門は冷酷に見つめていた。

葉売りの格好をした直助と藤八なる男が歩いている。

藤八「藤八」

直助「五文」

（繰り返し）

藤八十直助「奇妙」

と、左門が走り去っていくのが見えた直助――

直助「今のは四谷左門。ははあ、楊枝売り屋にいる娘のお袖に会いに来たのか。おい。俺はちょっと用事が出来た。今日の葉売りはここまでにするよ。じゃあな」

○浅草寺境内楊枝店

店先にやってくる直助、店内を見回し

直助「おおい。お袖さんはいねえかい？」

と、おかみが出てくる。

楊枝屋おかみ「お袖ちゃんはもういないよ。今日から違う所で働くてさ」

直助「えっ？ 一体どこで働くて？」

楊枝屋おかみ「（冷笑）按摩の宅悦んところさね」

直助「地獄宿」 お袖さんが、地獄をするって――」

愕然となるも、やがて下卑た笑みを浮かべる直助。

○藪内地獄宿

格子戸脇に、閻魔大王が灸を据えられた絵が描かれた、薄暗い宿屋。

直助、そそくさと入っていく。

○同／内

目明きの按摩、宅悦が内にいた。

宅悦「アイ、お入り。お望みは大かね小かね」

直助「何、灸を据えて貰いに来たんじゃないやねえ。その奥にいる女

の事で来たのよ。楊枝屋のお袖って子が入ったろう」
宅悦「——（ニツ）よござんす。どうぞ奥にお入りなすって」

○同／奥の部屋

妖しげな行灯の明かりが灯る室内で、ごろりと横になっ
ていている直助。と、入ってくる女郎姿のお袖。

お袖「御免成されませ、今晚は」

直助「よお、お袖さん」

お袖「（愕然）お前は直助！ どうしてこんな——」

直助「どうしてこんなはこちらの台詞よ。（品定めする目で身を
睨め）俺はな、ずっとお袖さん、あなたの事が眩しく
ってしょうが無かったんだ。ほれ、こっちに来い」
手を引く直助、抗うお袖。

お袖「何をするか無礼な！ お家はお取り潰しになったとは言

え武士の娘。下郎になど触られたくない！」

直助「（憤怒）何をしゃらくせえ！ おとなしくすりゃあ！」

お袖「いやああああっ」

力づくでお袖を倒す直助。必死になって逃れ、室外
へ出るお袖。

○同／廊下

お袖「あっ！」

ぱったりと出くわしたのは——、小間物屋姿に身を
やつした与茂七だった。

与茂七「おっ——、お袖さんか！」

お袖「与茂七様…… どうしてここに……」

と、後から出てきた直助、お袖の肩を掴み

与茂七「俺は客で来てるんだぜ——（与茂七を見て）！ あっ、
あなたは佐藤与茂七……」

直助「貴様、四谷家の下働きをしていた直助か。お袖さんから
手を離せ！」

直助「——るせえええっっ！」

殴り掛かる直助——。与茂七、憤怒の顔で直助の顔を脇差しの鞘で痛打する。

直助「痛ええええつ。ちきしょう！ 覚えていやがれ！」
逃げていく直助。

与茂七「大丈夫かお袖さん——。こんなところで働いているとは。私の事などもう忘れてしまっていたのか」

お袖「(涙ながらに)酷い事を仰る。あなたこそ、私という許嫁がありながら、この様なところへ遊びに来るとは情け容赦もない」

与茂七「(苦渋) そう言われれば一言もない……。いや、今はこんな小間物屋の格好をして町人には身をやつしているが、いずれはきつと、お袖さんを迎えに行こうと……」

お袖「与茂七様……」
抱擁しあう二人——。

○地獄宿前／夕暮れ

顔を腫らした直助、気分悪そうに出てくる。

直助「——このままじゃ腹が収まらねえ……。あの与茂七の野郎……」

○四谷家／縁側

貧しい武士の家を守っている、お岩。縁側に腰掛け、無意識に帯に手を触れ、遠い目をして追想に耽っている。

南 北「(モノ) 父親に伊右衛門との仲を割かれてはいるもの、お岩は伊右衛門を忘れられずにいた」

艶やかなお岩の唇が、伊右衛門を無意識に求め蠢く。

○浅草寺裏

伊右衛門の引き締まった唇——。
賑やかな仲見世を背に、ふと立ち止まっていた。

伊右衛門「……」

伊右衛門、暗い決意をした。

○四谷家／縁側

ふと我に帰り、振り向くお岩。

お岩「——（独り言ちて）お父様の帰りが遅いわ……」

不安な表情で思案するお岩。

○浅草裏田圃／夜

人寂しい田圃の畦道を、提灯を下げ、小間物屋装束の男が歩いていく。

やや離れた祠の陰から、その姿を邪悪な目で見つめている、直助。

直助「——小間物屋姿の与茂七、忘れやしねえ……」

直助、短刀を抜き——、通り過ぎていく小間物屋の背後に向かって、そろりそろりと近づいていく。

そこから少し離れた畦道。背を丸め歩いていく老人の姿。四谷左門である。

と——、左門を待ち構える様に立っている者がいた。

左門「！——民谷伊右衛門——」

暗い影中の伊右衛門の顔、目だけが冷たい光を放っていた。

伊右衛門「お岩との仲を裂いたばかりか、盗ッ人呼ばわりまで」

左門「（かっとなり）未だシラを切られるか！」

伊右衛門「（憎悪に顔を歪め）物乞いまでしていた風情でこの老いぼれが！」

伊右衛門、素早く抜刀、袈裟懸けに左門を斬る。

左門「うぐつつつ」

血泡を吹きながら絶命する左門。

伊右衛門「ふん……」

左門の着物で刀を拭い、収めようとした時——

背後から声。

直助「(オフ)死にやがれ与茂七!」

刺す音、低い叫び――。

伊右衛門「あの声は……」

小間物屋装束の死体に跨がり、何かをしていた直助の背後に現れる伊右衛門。

直助「誰だ!」

伊右衛門「お前は下男の直助だな」

直助「そういう声は民谷の旦那」

伊右衛門、小間物屋装束を見て

伊右衛門「殺したのか」

直助「佐藤与茂七よ。ちよいと意趣がありましてね」

伊右衛門「恨みだと……?」

直助、伊右衛門の袖に血飛沫を見る。

直助「民谷の旦那も誰か斬ったんですね」

伊右衛門「舅の四谷左門をな。その与茂七の死骸に何をしていた」

直助「顔の皮を剥いでおけば、当分疑われねえかと(ニヤ)」

伊右衛門「ふん……。成るほどな。ならあの老いぼれも――」

と――、遠くから石を踏む音がした。

伊右衛門「しっ――(耳を澄ませ)」

足早に、夜鷹の格好をして提灯を持った女がやってくる。お岩だ。

お岩「(息を切らしている)」

と――、背後からやはり走ってくる女がいる。

振り向くお岩。

お岩「――お袖?」

お袖「お岩姉様! どうしてここに?」

お岩、そそくさと被っていた手拭いを取り

お岩「お父様があまりに帰りが遅いので迎えに来たのです」

お袖「わたくしもです。今日、お父様が楊枝屋に来たと聞いて

――(言葉を濁す)」

お岩「お袖は、今日は楊枝屋には行かなかったの?」

お袖「——それは……」

目を逸らすお袖——、視線の先に、白い人の脚が見えた。

お袖「(小さく悲鳴)」

お岩「どうしたの？——(見て)」

近づく二人、そこには四谷左門と、小間物屋装束のうつ伏せになった死骸が並んでいる。

お岩「お父様」

お袖「その隣の——、小間物屋姿の死体は——、与茂七様」

駆け寄るお袖。だが、顔を見ようとして目を背ける。
お袖「お顔が！ 何と無残な—— あああああっっ」

お袖の悲痛な叫びが田圃に広がる。

お岩は、被っていた手拭いが落ちるも構わず、蒼白な顔で立ち尽くしている。

と、暗闇から出てくる男の影——。

伊右衛門「お岩——お岩がいるのか」

お岩「伊右衛門殿！ お父様が……」

伊右衛門「！ 義父殿が……。二人を一気に斬るとは相当の達人。一体何者の仕業だ……」

お岩、左門の遺骸に寄り添い——、いきなり左門の脇差しを抜いて己の首を刺そうとする。

伊右衛門「何をするお岩！」

お岩「あまりにも辛すぎる事ばかりの人生。お父様と共に終わらせます。離してください」

伊右衛門「馬鹿者—— お前が死んだら、誰が父上の仇を討つというのだ。義父殿の為に別れているとは言え、我等は夫婦。

お岩、義父殿の仇はお前と共に身共が討つ」

お岩「伊右衛門殿！」

ひしと伊右衛門を抱くお岩。

伊右衛門、優しげに微笑んだ。

と——、そこに現れる直助、お袖の前に立ち

直助「——先刻はあんな事があったが、お袖さん、与茂七様の仇を討つなら、俺に手伝わせて下さい。俺はあんたを助きたいんだ」

お袖「直助——。でも、お前は私の夫でもなんでもない」

直助「——（ニツ）ですから、仇討ちするまで仮初めの夫婦になるんですよ」

お袖「えっ」

直助「勿論、お袖さん、あなたの肌には触れないし、寝る時も別々の部屋だ。俺が疑われても仕方がない。だから、俺はお袖さんと仮初めの夫婦になっても、仇を討ちたいんですよ」

お袖「——判りました……」

直助「——（にっ）」

暗い決意の顔のお袖。伊右衛門に寄り添うお岩。

南北「（モノ）浅草裏田圃に、二つの死骸と、二組の歪な夫婦の姿があった。げに恐ろしきは因縁というもの——」

○雑司ヶ谷四ツ谷町 民谷伊右衛門宅

夏。蟬の声が喧しい。

南北「（モノ）月日は流れ季節は巡る。あれほど夫婦となる事を望んでいた伊右衛門であったが、岩が子どもを産むと、すっかりその情は消えてしまっていた——」

奥の部屋に吊られた蚊帳。その中にお岩が赤子を抱き、蒼白い顔でいる。

伊右衛門は、内職の傘貼りをしている。

軒先には宅悦がいて、恐縮している。

宅悦「わたくしが紹介した下働きの小平が、粗相をしたと……」
伊右衛門「逃げたばかりか、盗みまで働きおった」

宅悦「一体何を盗んだんで」

伊右衛門「民谷の家に代々伝わるソウキセイという薬だ」
宅悦「ははあ。お岩様が産後の肥立ちが悪く臥せっておられるというのに、よりによって薬を盗むとは不届き千万でございます。見つけましたら必ず……」

と、赤子が泣く声。

宅悦「お岩様にお薬をお持ちしました。只今差し上げます」
上がる宅悦、七輪に向かう。

お岩は表情を出さず、赤子をあやしている。

茶碗に薬を溶かす宅悦。

お岩「宅悦さん、いつもすみません」

伊右衛門「この貧乏な暮らしで、赤子まで産むとは気の利かない」
吐き捨てる様に言って刷毛を放り、立ち上がる。

お岩「お出かけですか。どちらへ」

伊右衛門「知った事か（と刀を腰へ）」

お岩「お早くお帰り下さいませ」

出て行く伊右衛門。

宅悦「ささ、お岩様。お薬でございますよ」
お辞儀をして送った宅悦、蚊帳の中に入って行く。

蒼白な顔のお岩、じっと表情を消している――。

○伊右衛門宅外

気分悪そうな顔で出て行く伊右衛門。

と――、軒の陰よりじっとその姿を見つめている者
達がいた――。

お梅とその乳母お槓。

伊右衛門、ふと立ち止まり相貌を見せる。

お梅、はっとした顔をし、胸元を強く絞る。

お梅「ああ……伊右衛門殿……」

伊右衛門、再び背を向け歩いていく。

お梅、ふらりと足元を崩す。

お槓「お梅様！ しっかり！ お梅様！」

○浅草／居酒屋

独りで酒を呑んでいる伊右衛門。

○伊右衛門宅／蚊帳の中

寝入った赤子に団扇で風を送っているお岩――。
その岩の唇、何かを呟いている様に動いている。

○小路

帰宅しつつある伊右衛門。
と——、前に一人の女が立っていた。お梅だ。

伊右衛門「……」

歩み続ける伊右衛門。
お梅は目を合わさず、じっとしている。

○岩の唇

何かを呟き続けている岩——。

○小路

お梅の脇を通り抜ける時、ちらと斜に梅の顔を見る
伊右衛門。
俯いたお梅の横顔は美しかった。

伊右衛門「……」

お梅はたったまま、背中に聞こえる伊右衛門の歩き
去る音を聞いている——。

暗転

○伊右衛門宅

数日後。

荒々しい声が響く。

長兵衛「(オフ) 民谷！ 民谷はおるか！」

傘貼りを止めて立ち上がり、軒先に向かう伊右衛門。
と、未だ若い貧相な男を縄で縛り、連れてくる浪人
仲間の長兵衛。宅悦も従っている。

伊右衛門「長兵衛、小平を捕らえてくれたのか」
小平「すみません！ すみません！ 民谷様！」

宅悦「盗んだ薬とはこれでございますか」

と宅悦、袋を伊右衛門に渡す。

伊右衛門「おお、これぞソウキセイ。おい小平、この薬盗んでどうしようとした」

小平「はい。私の前の主人は大病を患い、足腰が立ちません。ソウキセイならばきっと治ると思い——。申し訳ありません」

長兵衛「だからと言って盗みを働くとは不届き千万。おい伊右衛門、どうする」

伊右衛門「——そうだな……。まずは手の指を十本、全部折ってやろうか」

蚊帳の中のお岩、無表情にじっと聞いている。

長兵衛「おお、そいつは面白い趣向だな」

小平「どうかお許しを！どうかお許しを！」

伊右衛門「煩いな。長兵衛、こいつに猿轡をしろ」

長兵衛、用意よろしく小平の口を塞ぐ。

伊右衛門、小平に近づき——、

小平「(恐怖に呻く)」

伊右衛門、小平の鬢を一掴むと——、力任せに引き抜く。ブチブチブチニ

小平、激痛に声を上げる。

宅悦は酷さに目を背ける。

お岩、じっと聞いている——。

と——、玄関口より女の声。

お榎「(オフ)ごめんくださいまし。ごめんくださいまし」

伊右衛門「誰だ——」

宅悦「見て参ります(と向かう)」

伊右衛門「長兵衛、小平を押し入れにぶち込んでおいてくれ」

長兵衛、小平を杉の木目の二枚戸の押し入れに投げ込む。

○同／玄関

伊右衛門、奥から出てくる。

そこにいたのは、お梅の乳母だった。

宅悦「ご近所の伊藤家から使いに参られたお槓様です」

礼するお槓。

伊右衛門「して何用でしょうか」

お槓「奥方様の御出産お祝いに参りました。（背後の家来に）

こちらへ」

伊藤家家僕、玄関に運び込む角樽の酒、重箱等。

伊右衛門「……」

お槓、薬の包みを差し出す。

お槓「それから——（懐から紙包みを出し、伊右衛門に）これ

は主人の伊藤喜兵衛から預かりました薬でございます。

産後の血の道をよくするものと。是非お岩様に」

伊右衛門「これは——、かたじけない……」

お槓「ご近所のよしみ。是非とも民谷様には、伊藤の家にお出

で下さりますよう」

伊右衛門「ここまでの事をして下さるとは——、一度ご挨拶に伺

わずばなるまいでしょう」

お槓「（破顔）ではお待ち申しております」

頭を下げ、出て行くお槓。

寂然としない顔の伊右衛門。

宅悦「では、お岩様のお薬は早速——」

伊右衛門から薬の包みを受け取り、奥に行く宅悦。

その、薬の包み——。

毒々しい色が紙を透けて見える——。

蚊帳というシェルターの中で、じっと成り行きを聞

いていたお岩——。

自室でじっとし、微笑んでいるお梅——。

南北「（モノ）お岩と伊右衛門を巡る怨念の宿命は遂に後戻りの出来ぬ地獄坂を転がりだした」

自らの運命が動きだした事を察知している伊右衛門。

宅悦によって、湯に溶かされる毒々しい薬――。
南北「(モノ)この薬が如何なる災厄をもたらすか――、それは次の幕にて」

序の幕 降りる